

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

金子 亜美

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院 総合文化研究科 文化人類学コース 博士課程

【研究題目】

17-18 世紀、南米チキトス地方のイエズス会布教区における先住民のキリスト教化と音楽

【研究の目的】(400字程度)

植民地時代のスペイン領アメリカにおいて、先住民のキリスト教化は一大事業であった。その一翼を担ったのが諸修道会の宣教師である。申請者が研究する南米チキトス地方(現ボリビア東部低地)での宣教活動を担ったのはイエズス会である。彼らは17世紀末から18世紀半ばにかけてこの地域に「布教区 *misiones*」を設立し、周辺に散在していた多民族・多言語の先住民を集め、宣教のために定住生活を行わせた。人々はそこで一つの民族名称をもつキリスト教徒の集団となり、以来今日までカトリックの実践を続けている。

本研究の目的は、イエズス会時代に当地の布教区で用いられた楽譜写本に焦点を当て、音楽がいかなる宣教上の効果を持ちえたのかを明らかにすることである。イエズス会士らは音楽を、宣教上すぐれた効果を持つものと考えていた。しかしその効力の範囲を見極めるためには、言説の水準のみならず実際に用いられた音楽の構造や歌詞にアプローチする必要がある。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究では、以下三種類の作業を行なった。

1. 楽譜写本の閲覧・複写の撮影・転写

ボリビア多民族国に渡航し、チキトス地方のコンセプション市のチキトス音楽文書館を訪問した。カタログをもとに所蔵されている楽譜写本の全体像を把握し、上記研究目的に資する史料の選定を行った。その上で、布教区での音楽活動におけるジェンダーごとの役割の変容を知る上で示唆的な史料として、カタログナンバーのうちCH(チキト語の歌詞を持つ声楽曲)と、AM(聖母マリアのアンティフォナ)、AN(アンティフォナ)に属す写本の複写の撮影を行った。またCHについては、適宜オリジナル写本を参照しつつ歌詞の転写を完了させた。

2. 楽譜写本の基礎的研究

まず、どのようなレパートリーが文書館の史料を構成しているのか、どのような楽器が用いられているのか、声部分けなどの音楽構造に関する基礎的な側面を把握した。

次に、楽譜写本の歌詞に用いられている言語がどのようなものであるかを把握した。典礼音楽の多くはラテン語だが、中にはスペイン語や先住民言語チキト語も見られる。特にチキト語は、男性変種と女性変種の差異があるという特徴を備えており、写本に使われている変種は男性変種であることを確認した。

最後に、楽譜写本にある声楽曲には、ソプラノ・アルト・テノール・バスといった声部分けがなされていることを把握した。一部の楽曲については五線譜 PC ソフトを用いて転写を進め、今後の考察のためのデータ収集ができた。

3. 文献研究・成果発表

大阪・国立民族学博物館において、南米辺境地帯の布教区における表象文化についての文献研究を行

った。また、今回把握したチキトス音楽文書館の史料の基礎的情報の一部について、音楽研究関連の共著で言及した。その際、複写した史料の一部やアーキヴィストの写真を、文書館の許可を得て掲載することができた。本共著は、2019年10月に風響社より公刊予定である。

【結論・考察】（400字程度）

布教区の音楽の多くは典礼のための音楽であり、先住民のキリスト教化のために書かれたと考えられる。その多くが単旋律ではなく四声部の合唱で歌われていたということは、先住民社会における音楽活動にとって大きな意味を持ったと考えられる。というのもイエズス会時代以前の先住民社会において、多くの場合歌はジェンダー化された実践だったからである。布教区において男女の別は声部の別へと転化され、器楽伴奏のうえに協和させられたわけだが、このことはイエズス会が築こうとした秩序ある布教区という理想と無関係だったとは考えられない。イエズス会宣教師の考えにおいて建築や音楽などは、調和した空間としての布教区の形成に資するものとされていたからである。その実際の効用については、宣教師の言説のみならず、実際の音楽や歌詞の扱いの分析と組み合わせて今後検討されなければならないが、今回の研究でその基礎的な情報が整った。特に変種の男女差を兼ね備えたチキト語の歌詞をもつカタログナンバーCHの史料を中心に今後考察を続けていきたい。